

大窪寺

真言宗の聖地である大窪寺は、四国巡礼の最後の寺となる第 88 番札所です。この寺院は、香川県と徳島県の県境近くの標高 774m の女体山の山腹に広がる境内を有し、巡礼者だけでなく一般の観光客も訪れる場所となっていますが、その多くは巡礼の最後の 3 箇所の寺院を巡る「上がり三カ寺」巡りへの参加者で占められています。寺の歴史によると、8 世紀初頭、行基（668-749 年）という僧侶が四国を巡る旅の途中で現在の大窪寺のある場所を訪れたのが始まりとされています。また、四国巡礼の開祖とされる空海（774-835）との関わりも言われており、本堂裏手にある独特な形をした断崖の中腹にある洞窟で修行をしたと伝えられています。この洞窟で、空海は医薬と治癒の仏である薬師如来の姿を彫り、仏教の三大国であるインド・中国・日本と運ばれてきた杖を奉納し、「大きな穴の寺」を意味する大窪寺と名付けました。

ほとんどの四国巡礼者は、大窪寺で長い旅を終えるため、寺の境内には、巡礼者が帰宅前に寺に奉納した杖を納める貯蔵庫があります。大師堂の隣に位置するこの貯蔵庫に納められた杖は、毎年春と夏に焚き上げの儀式を行い、供養されています。大窪寺の参拝者は、大師堂の地下にある部屋へと降りていくと、四国巡礼の気分を味わうことができます。ここでは、八十八箇所の寺院の仏を象った 88 体の像が巡礼路に沿って安置されています。それぞれの像の前の床下には、象られた仏を祀った寺院の砂が入った袋が置かれています。この砂はその寺院の聖地を表しており、それを踏んだ者は実際に聖地を訪れた者と同じ祝福を受けることができます。この小型版の巡礼路は、健康や時間の制約により、実際の巡礼路を旅することができない人のために設けられたものです。

標高約 450m に位置する大窪寺では、冬に雪が降ることもあります。1 年で最も寒い時期に差し掛かる 11 月には、境内一帯に生えるイチョウやモミジの紅葉を見ようと、多くの参拝客が訪れます。